

緩和ケアだより

平成27年度 第3号

市民公開講座を開催しました！！

みなさんをご存知の通り、今や日本人の2人に1人が生涯に一度はがん罹患するといわれる時代です。多様な価値観のもと、自分らしいがんとの向き合い方や、もしもがんになったら何を大切に過ごしたいのかについて、あらかじめ考え、医療者や家族と話しあうこと（アドバンス・ケア・プランニング）をテーマに、緩和ケアセンター、地域医療患者支援センター・がん相談支援センター主催、秋田県の後援のもと、市民公開講座を開催しました。その時の様子をご紹介します。

- ・テーマ：**がんと向き合うために
～もしもの時のことを一緒に考えてみませんか～**
- ・日時：平成27年10月24日（土）10：00～12：00
- ・会場：秋田拠点センター アルヴェ 2階多目的ホール
- ・参加者：60名（患者：約20%、患者家族：約15%、医療関係者：約15%）



進行がんであることを患者・家族へ告知する場面をスタッフが演じ、参加者のみなさんに疑似体験をしていただきました。その後、それぞれが感じたことについて意見交換を行い、会場全体で共有しました。

シンポジウムでは、医師、看護師、MSWの立場から、意思決定支援において大切にしていることをテーマに講演を行い、参加者のみなさんとの意見交換を行いました。



参加者の声（アンケートより一部抜粋）

- ・告知の場面を体験する企画は参考になりました。考えさせられる内容でした。
- ・健常のうちから家族と話し合いをすることが大切だと感じました。
- ・がんと聞いただけでショックを大きく受けてしまうけど、緩和ケア、がん相談支援センターなどがあることを知り、困った際に相談に乗ってくれる人が多くいることに心強く思いました。

コラム

病気になるということは、そのご本人はもちろんのこと、ご家族やその方にかかわるすべての人にとってもつらい体験となります。

周囲の人のつらさは、病気を持つつらさを抱える人の力になりたいと思いながらも、「どうやったら力になれるか分からない」、また「その思いを十分にかなえられないのではないか」と感じることからくる気持ちと考えられます。その戸惑いや困惑のために、その人のそばで時間を過ごしたい、その人の話を聞きたいと思う気持ちに反して、そうすることにむずかしさが生じるのはとても苦しいことです。

そのような気持ちのつらさを一緒に抱え考えてくれる人がいることは、サポートする人の大きな助けになると言われています。ご家族やその方の治療やケアを担うスタッフに支えがあることは、病気を持つ人のつらさや不安が和らぐことにもつながると考えられます。

現在、緩和ケアセンターには、週に2日、心理士が勤務しています。気持ちのつらさを感じたとき、緩和ケアチームに相談するという方法もあることを心に留めておいていただけるとありがたいです。よろしくお願いいたします。

緩和ケアセンター 心理士 清水和美



緩和ケアQ&A

Q

Q.リンパ浮腫の治療について正しいものはどれでしょう？

- (1) リンパ浮腫の治療にフロセミド（ラシックス）は有効である
- (2) リンパ浮腫の治療にステロイドは有効である
- (3) 進行期がん患者の低タンパク血症による浮腫にはアルブミン製剤の補給は必須である
- (4) リンパ浮腫への対応の主体は非薬物療法である

- (1) × 低タンパク血症による浮腫にはフロセミドは有効だが、リンパ浮腫には効果が期待できない
- (2) × がんによるリンパ管閉塞に対する副腎皮質ステロイドの使用の報告はあるが、確率された治療ではない
- (3) × 悪液質によるアルブミン低下の場合、アルブミンを使用しても悪液質が改善する可能性は低く、浮腫も改善する可能性は低い
- (4) ○ リンパ浮腫には、リンパドレーナージなどの非薬物療法が有効である

答え

